

# 元代応昌路城址の復原に関する基礎的考察

町田吉隆\* 中尾幸一\*\*

A primary study about restoration in the ruin of the Ying Chang Lu in the Yuan Period

Yoshitaka MACHIDA\* Kouichi NAKAO\*\*

## ABSTRACT

After the 7th century, many cities were constructed at northeast Asia. But, remains in many cities become extinct already, and that we check its reality becomes difficult every year. The Chinese Neimenggu east where be able to observe city remains is a few place in such. We investigated about city remains in the Qitai age and made a restoration figure formerly. We visited the city remains whose named Ying Chang Lu cheng (応昌路城) in the Mongol Empire age in summer of 2016. This investigation report was performed by the thesis of Ying Chang Lu cheng (応昌路城) and a restoration figure was made.

*Keywords* : the city remains, Mongol Empire, history

## 1. はじめに

本稿では方形城郭都市としての元代の応昌路城址を取り上げる。方形城郭都市とは「防衛上および行政上の必要に応じて都市周縁に城壁を築造する計画的に造営された都市」を指す。このような形態を有する都市遺跡は西アジアや中国において古代より形成されてきたが、日本列島を含む北東アジア地域各地で造営される例が増加したのは、隋唐帝国の軍事的、文化的影響が顕著になる7世紀後半以降のことである。

と同時に、各地域には各々特色を有する方形城郭都市が生まれた。日本における藤原京、平城京、平安京など中国の都城プラン(造営計画)からの影響を受けながら、城壁を持たなかった都市は、その最も特異な例と言えよう。

方形城郭都市に関する研究は文献史料に依拠して進められた豊富な研究史を有する。一方、日本における平城京調査に見られるような、都市全域での考古学的な発掘調査が行われている遺跡の例は必ずしも多くはない。特に方形城郭都市の上に、現代の都市生活が営まれている中国や韓国においては、日本の都市部での遺跡調査と同じように断片的な発掘調査が集積されている現状がある。

\* 一般科 教授

\*\* 都市工学科 名誉教授

そのような中で我々がフィールドとして選んだ中国内蒙古自治区東部や遼寧省には、方形城郭都市遺跡を人工衛星画像など空中写真によって確認することができる例があり、リモートセンシングと現地での調査と併せれば、方形城郭都市遺跡を復原できる可能性がある。筆者らは先に内蒙古自治区赤峰市の巴林左旗管内で、10-11世紀の間、遼朝(契丹国)の都城であった「遼上京遺址」と、その初代皇帝であった耶律阿保機の奉陵邑であった「祖州城遺址」について、リモートセンシングを用いて検証した(1)。その結果、この手法は方形城郭都市研究の基礎データとなる平面図の作成、さらに改良を加えれば、復原図をも作成できる見通しを得た。今回、同じ赤峰市に属する克什克騰(ケシクトン)旗管内にある13世紀に造営された元代応昌路城址(東経116° 27' 43" 北緯43° 15' 15")の調査と復原図の作成を試みた。

## 2. 北東アジア方形城郭都市遺址の研究概況

本稿では現在の中華人民共和国の境域のうち、東北三省(黒竜江、吉林、遼寧)、自治区(内蒙古、寧夏回族、新疆ウイグル、チベット)以外の地域は対象外とする。いわゆる「内中国」を除く長城以北、以東を北東アジア地域と称することにしたい。



図1 方形城郭都市の位置関係(中尾作図)

この地域で最も早く、隋唐など北朝系の都城の影響を受けて都城を造営したのは渤海国であろう。高句麗(平壤城)、新羅(慶州城)などには条坊が整備されてはいなかった。8世紀に渤海国では上京竜泉府(現在の黒竜江省寧安市)、東京竜原府(現在の吉林省延辺朝鮮族自治州琿春市)、中京顕徳府(現在の吉林省和竜市)などの都城が作られた。8世紀半ばに首都となった上京竜泉府は同時代の日本の都城と同じく条坊に区画され、周囲に全長約16kmの城壁がめぐらされ、城壁表面は礫石で覆われていた。同時代の日本の平城京とほぼ同じ規模であった。一方、東京竜原府は八連城址に、中京顕徳府は西古城に各々比定されるが、これらは全長約2.8kmと規模も小さい(2)。条坊に相当する市街は確認されておらず、本論考が扱う応昌路城址などの城郭都市と類似した規模、構造を有していた。

渤海国を926年に滅ぼした契丹国(遼朝)もその領域各地に都城を建設した。建国当初より首都となった上京臨潢府(現在の内蒙古自治区赤峰市巴林左旗)は全長約13.5kmの城壁を持つ都城として938年に完成した。城域は北部に皇城を持つ「内城」が、南部に市街を有する「漢城」を持つという独特の構造を有していた(3)。

また後に首都となった中京大定府(現在の内蒙古自治区赤峰市寧城県)は全長約15.4kmの城壁を持ち、内城には同時代の北宋の首都汴京(現在の河南省開封市)と同様の市街を有していた(4)。その他、南京析津府(現在の北京市)は、12世紀に金朝の首都である中都に、13世紀には元朝の首都、大都へと継承され、明、清両朝の北京城へと発展する。

このような都城以外にも契丹国(遼朝)は支配地域に多くの州県城を設置した。現在の内蒙古自治区、遼寧省からモンゴル国にまたがる広大な地域で、その遺址が確認されている。たとえばモンゴル国のヘルレン河屈曲部(トゥブ県アルホスト郡ガリョート)に位置する13世紀のモンゴル帝国時代の「ブールルジュート城」は契丹国(遼朝)時代に築かれた城郭都市を再利用したものであると言う(5)。北東アジ

ア地域で方形城郭都市の造営が進んだのはこの時代であり、おおよそ10世紀が画期になると考えられる。つまり、北東アジア地域では7世紀以降、中国の都城プランが受容されることによって、方形城郭都市の造営が広がるが、10世紀以降、都城よりも個々の規模は小さいが、はるかに多数の城郭都市が造営されるようになった。またこのような城郭都市を形成したのは契丹人(モンゴル系)や女真人(ツングース系)など非漢人であった。

契丹国(遼朝)に代わり、女真人の完顔部が建国した金朝が12世紀には北東アジアを支配した。金朝も上京会寧府(現在の黒竜江省哈爾濱市)など、やはり五京と称される都城を造営した。この時期にはアムール川、松花江、支流の牡丹江、ウスリー川流域に数多くの城郭都市が建設されている。それらは防衛的な性格を有し、平地部に造営される場合と、山上、山腹など、いわゆる山城的な性格を有するものに分けることができると言う(6)。

金朝は13世紀初めモンゴル高原に興起した大モンゴル国に攻略されて1234年に滅びるが、その軍事的圧力は12世紀後半には顕著になっていた。その防衛線として築かれたのが「金界壕」と呼ばれる土塁の長城である。黒竜江省から内蒙古自治区、河北省の北部にかけての約1,700km、また現モンゴル国の国内にも約400kmの遺址が確認されており、総延長は約2,500kmに及ぶ。図2は現地で見学することができた「金界壕」の一部である。

土塁の北側、西側つまりモンゴル高原側は積み上げた土を掘った跡と思われる溝が刻まれており、騎乗したままでは土塁を乗り越えることができないようにしたと考えられる。土塁の南側、東側つまり金朝の境域には、一定間隔で「堡城」が置かれていた。この「堡城」も形態としては方形城郭都市と言える。今回、調査の対象とした赤峰市克什克騰旗管内では17箇所の「堡城」が確認されている(7)



図2 ダリノール北方の金界壕遺址

金朝の支配地域は元朝(大モンゴル国、以下、元朝と記

す)に継承され、大都(現在の北京市)が首都となった。それ以前に大モンゴル国のカラコルム(現在のモンゴル国ウブスハンガイ県オルホン河畔ハラホリン)が第2代カアンのグクにより築かれていた。また夏の都として元上都(現在の内蒙古自治区錫林郭勒(シリングル)盟正藍旗)、大都と上都を結ぶルート上に元中都(現在の河北省張北県)が造営された。応昌路城址は大都と上都を結ぶ線の延長上に位置している。他にもかつての遼中京が大寧路となるなど、各地に方形城郭都市が建設された。

このように北東アジア地域には8世紀以降、重層的に方形城郭都市が形成されてきたことがわかる。中でも今回調査した内蒙古自治区東部は方形城郭都市が数多く分布していた地域である。

元朝は14世紀半ばに明朝に敗れて、モンゴル高原に退く。その後も清朝にカアン位を譲り渡すまで存続するが、北東アジア地域での方形城郭都市建設はこの時期に止まる。18世紀以降、満洲や内蒙古には漢人が入植して、再び都市が形成され始めるが、そこでは従前の方形城郭都市が利用されることはなかった。このことが現在、調査が可能な遺址が保存状況の良い状態で残存している理由でもある。

本稿が扱う応昌路城址は北東アジアで8世紀以降発達した都城、その後10世紀以降、急速に数を増した比較的小規模の方形城郭都市の最終盤の事例となる。方形城郭都市の変容過程を考える資料の一つと言える。

### 3. 元代の応昌路城

応昌路城は造営された年代が明確な都市遺跡である。元朝の世祖クビライの至元七年(1270年)8月に官司が設けられた。その経緯について、『元史』巻118 特薛禪伝にはチンギス・カンの第一夫人ボルテの甥の子であるコンギラト族の幹羅陳オロチンが妻でクビライの娘であるナンギャジン公主と共に、ダリノール湖畔に城邑を造営することを奏請した結果、応昌府の設立が認められたと記す(8)。チンギス・カンの岳父となった特薛禪デイ・セチェン以降、コンギラト族のアルチ・ノヤン家はオゴデイ家とトルイ家に娘を嫁す一方、公主と結婚する駙馬となった最有力の姻戚であった(9)。ここにその拠点となる城郭都市を築いたのであろう。応昌路城がいつ完工したのかは定かではないが、至元十四年(1277年)に只兒瓦台ジルワダイが反乱した際に応昌路城が包囲され、魯国公主たるナンギャジン公主が危地に陥った。この時は契丹族出身の將軍移刺元臣がジルワダイを撃退すると共に、その後、数年にわたり、この地に駐屯している(10)。1270年代後半には城郭都市が防衛上も機能していたことが明らかである。至元二十二年(1285年)に応昌府が応昌路に昇格しているのは、この混乱の後のことであろう。幹羅陳オロチンの死後、曩加眞公主ナンギャジン公主はその弟帖木兒テムル、さらにその弟蠻子台マンズダイとレビレート婚により結婚しているが、元貞元年(1295年)各々魯国大長公主、濟寧王となった夫妻

は冬営のための城郭の設置を成宗テムルに申請して認められている(11)。これが現在の赤峰市翁牛特(オンニウト)旗に設けられた全寧府で、翌々年にはやはり路に昇格している(12)。つまり、応昌路城および全寧路城はクビライの娘であるナンギャジン公主と結びついたコンギラト族の勢力が造営した城郭都市であった。

幹羅陳オロチンとナンギャジン公主は「本藩所受農土」と述べたと『元史』には記すが、現在の赤峰市南部地域がコンギラト族の所領として認められていたのであろう。13世紀後半において同地域のコンギラト族は元朝成立以前と同じく遊牧生活を営んでいたと思われる。そこに城郭都市を建設した理由は何であったのか。

クビライが大都と上都の造営を開始した後に応昌路城の造営は始まっている。また全寧路城には金代に官司が置かれていたのに対し、応昌路城は付近に金界壕に付随する堡城があるにもかかわらず、新しく造営している。夏営地として、夏季には公主や駙馬が日常生活を営み、役人や工匠たちも居住させる機能を有していたと思われるが、コンギラト族は濟寧路(現在の山東省西部)をはじめとする中国本土にも封領を有していた。また達魯花赤ダルガチをはじめとする官僚を独自に任命して、元朝の支配機構は関与していなかったとされる(13)。応昌路城には行政や手工業生産を担う機能以外に従前の契丹国(遼朝)、金朝の州県城とは異なる性格、たとえば元朝の都城(大都、上都)に対応するコンギラト族独自の政治的権威を示す役割も有していたのではないかとと思われる。

その後、14世紀に入り、応昌路と全寧路は元朝の支配下と離れていた(14)。至正十四年(1354年)に元朝が再び路として行政機構に組み入れた理由として、役人による統治に支障があったとされるのは、コンギラト族の持つ支配権、税収を元朝に回収しようとしたものであろうか。至正二十八年(1368年)順帝トゴン・テムルは紅巾の反乱軍の中から派生した明によって大都を追われ、応昌路城に入った。1370年、順帝の死後、明軍が攻め入り、応昌路城の歴史はちょうど一世紀で幕を閉じた(15)。

### 4. 応昌路城址の現況

2016年の夏、我々の調査班は現地に赴いて応昌路城址を見学する機会を得た。8月10日朝、赤峰市克什克騰旗の中心、経棚の町を出発し、正午前にダリノール湖の西側に回り、「元代応昌路遺址」に到着した。

2001年に全国重点文物保護單位に指定・公布された同遺跡東側には平屋の博物館が建設中で、遺跡の管理と遺物の保管を行っている。展示物としては、応昌路城址および付近の城隍廟などで採集された瓦當と磚、石棺や魯王宮玲瓏石などの石造物、城址から東南約33kmにあった龍興寺に泰定二年(1325年)に立てられた石碑(応昌路曼陀山新建龍興寺碑)などがある。現地では布和氏(克什克騰博物館)と巴達仁貴氏(応昌路工作站)が展示および遺跡を案内、説明して下さった。



図3 応昌路遺址の博物館

応昌路城址はダリノール湖の西南に位置し、城址の南側には小さな川があって、その北側の丘の上に位置している。城址は南北約650m、東西約600mのやや南北方向に長い方形をなしている(16)。東西の城壁の南端から約150m、つまり城壁南よりの位置に城門が設けられ、城壁外側に向かって甕城を築造している。南城壁にも東端約250mの位置に城門が開かれ、甕城が設けられている。北城壁には城門はなく、東南西三面の城門は正中線より偏った位置に開かれていることになる。

城壁の保存状態は良好で、現在の高さは高いところで約3mの高さがある。



図4 魯王宮址東北の寺院址から東城壁を望む

城壁の高さは東城壁の方が西城壁よりも高い。現地での説明によれば、西風が冬から春にかけて強く、西城壁の方がより浸食が進んだためであろうとのことであった。

また、城址周辺の環境は夏季には図5などに見られるように草原となり、冬季は枯れた草本の上を降雪が覆う風景が広がるとのことであった。一年を通じて砂漠化することのない環境が、城址の風食・崩壊を止める役割を果たしてきたと考えられる。

城壁の崩壊箇所には版築断面が観察できた。一層の厚さは約5-8cmで、契丹国(遼朝)時代の遼上京址や慶州城址と同様である。

地表面で観察できる大規模な建物址は中央、西北隅にある。また中央建物址の西側および東北、東城壁沿いにも

南北方向に基壇址と思われる段差がある。中央建物が公主やコンギラト族の駙馬が居住した「魯王宮」址と考えられ、王宮東北の建物は寺院址と想定されている。これらの基壇址には礎石が地表面に現れている箇所もある。石材は克什克騰旗内で産出するものとの説明があった。

西側建物址からは石碑の一部が見つかっており、「應昌路新建儒學」とあることから孔子廟、学校もあったことがわかっている。城外の城隍廟なども含め、応昌路城に役人など漢人が多数居住していたものか、あるいは元朝の首都となった大都や上都が持つ機能を、姻族コンギラト族の都においても備えようとしたものか、一考の余地がある。

ただし、1960年代の調査以降、本格的な発掘調査は行われていないので、遺跡群全体の真相はなお不明な部分が多い。



図5 魯王宮址の柱礎石 門の遺構か?

### 5. 応昌路城址復原について

参考文献(17)および現地で撮影した写真に基づいて復原図の作成を試みた。城壁の形状および位置は他の城郭都市を参考にしつつ現況図から推定した。

#### 5.1 城壁の推定

図6のような城壁とした。城壁の高さは応昌路城址の規模や現況から6mとし、版築の城壁であることから、女牆は高さを1.6mとし、厚さは1.0mとした。

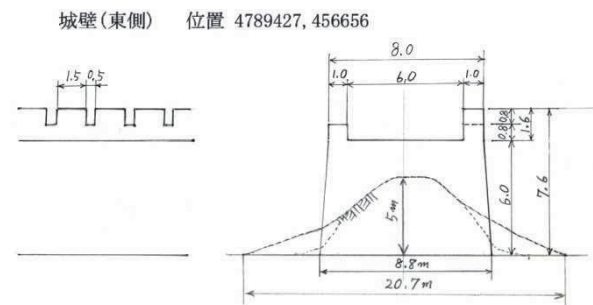


図6 城壁の標準の形状

城壁四隅は、少し高く堅固な一角が設けられていたものと推察されることから、図7の城壁を設けた。

隅楼 (南西隅) 位置 4788839, 456011

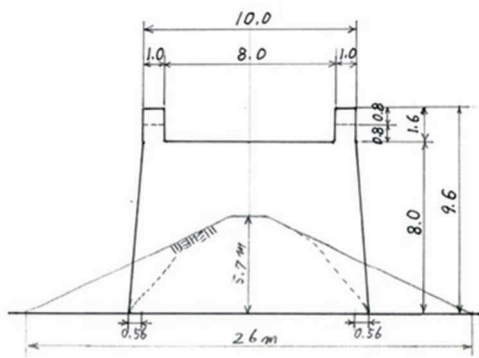


図7 四隅の城壁

城門には南門には四角形、西門、東門には半円形の甕城があったことが推察できる。甕城の形態を南と東西で変える例は元上都にも見られる。また、門の規模は、現況図から推定して、図8のようにした。

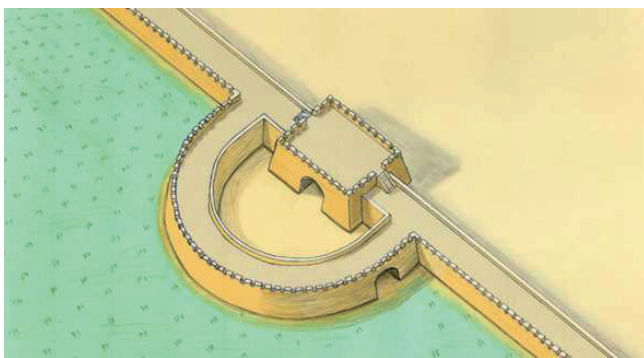


図8 応昌路西門の鳥瞰 (推定図)

### 5.2 復原鳥瞰図

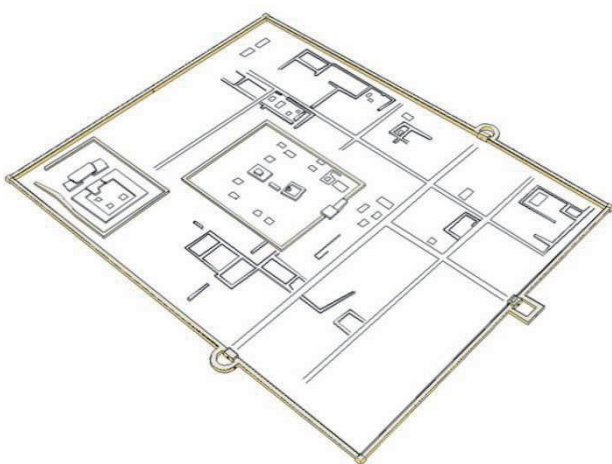


図9 元応昌路城復原鳥瞰図 (南西面)

復原した応昌路城址のデータを用いて図9のような鳥瞰

図を作成した。城址内部の建造物については参考文献および城址博物館内に展示・掲示されていた建造物配置図を参照した。

### 5.3 復原図作成上の問題点

応昌路城址については、詳細な発掘調査報告が無いため、13世紀に造営された元上都を始め、他の城郭都市との比較・照合が必要になる。今後、特に城壁の高さ、幅、形状について、より多くの資料が必要と考えている。

### 5.4 復原図作成により得られた事項

(1) 今回は現状を知るために、Google Earthを用いて、応昌路城址の位置や周辺の状況を調べた。この手法での有効性は確かめられたので、今後は人工衛星画像、たとえばALOSのPRISM、AVNIR-II、AW3D30などの使用を検討する。

(2) 応昌路城址の東西の城壁の方位が、真北を意識して決められていることが推察できた。元上都の外城址、北京の紫禁城址もGoogle Earthの画像上でそれぞれ東西の城壁の方位を測定したところ、同様に真北を意識して造られていることが推察できた。その値を表1に示す。

表1 城壁の偏位角

		座標値の偏位角	子午線収差	真北からの偏位角
元応昌路	西	2° 16' 58.3"	0° 37' 43.6"	-2° 54' 41.9"
	東	1° 32' 29.0"	0° 38' 2.4"	-2° 10' 31.4"
元上都	西	0° 0' 25.0"	0° 26' 18.1"	-0° 26' 43.1"
	東	0° 8' 8.1"	0° 27' 24.5"	-0° 35' 32.6"
北京紫禁城	西	2° 0' 57.2"	0° 36' 21.4"	-2° 37' 18.6"
	東	1° 48' 10.0"	0° 36' 45.5"	-2° 24' 55.5"

10,11世紀に造営された契丹国(遼朝)時代の遼上京や遼中京においては真北とのズレが大きい。磁北のように時間的変位に影響されるものではないので、何らかの理由があったと考えられる。一つの推論としては、この間に方位測定や造営時の測量に技術的発展があったことを反映しているものと考えられるであろう。契丹国(遼朝)時代には土木・建設技術において、真北を意識した設計がなされず、13世紀以降の城郭都市建設においては重要視されるようになったのではないかと推察される。今後の検討を要する課題の一つと言える。

### 6. むすびにかえて

以上、述べてきたことをまとめる。北東アジア地域の方形城郭都市遺跡としての応昌路城址には次の特色がある。  
① 応昌路城址は造営および廃城となった時期が文献史により明確な方形城郭都市遺跡である。至元七年(1270年)に建設が始められ、1270年代にはすでに城郭都市として防衛機能を有していた。1370年には明朝の軍隊が侵攻、破壊を受けているので、13世紀後半から14世紀後半まで存続した方形城郭都市として年代基準となる遺跡である。

② 応昌路城址は近隣に存在した契丹国(遼朝)時代や金代の方形城郭都市を再利用せずに造営されている。また

元朝皇室の有力姻戚であったコンギラト族の投下領に作られた政治的な意味合いを有する都市であった。契丹国(遼朝)時代の州県城や金界壕の「堡城」など調査対象とした内蒙古自治区東部や遼寧省内に分布する、前代の方形城郭都市とは異なる性格を有していたと考えられる。

城壁の東、南、西面には城門を「甕城」の形態で築造しているが、うち東西の2箇所は半円状に、南は方形に突出部が形成されていることを指摘したが、これに先んじて元朝の憲宗モンケの五年(1255年)に計画され、成祖クビライの中統五年(1264年)に上都と命名された元上都址の外城が南北は方形の、東西は半円状の「甕城」を持つ。また応昌路城が真北に基づいて造営されていたことも、元上都との共通点であり、先行する時代の方形城郭都市とは異なっている。これらは応昌路城が元上都を造営上のモデルにしていたことを示す事例であり、時間的経過に基づく設計様式の変容というだけでなく、都市の機能、位置づけとも関連する変容という側面があるように思われる。

今回の調査で明らかになった検討を要する点を精査することは10世紀以降の北東アジア地域における方形城郭都市が持つ性格を分類し、また変容の過程を考察する上で一つの指標となると考える。

#### 付記

本論考は平成28年度科学研究費(基金)基盤(C)課題番号16K01174(研究代表者 町田吉隆)による成果の一部である。

#### 参考文献および註

- (1)大山耕生、中尾幸一、町田吉隆「衛星画像を用いた中国・遼上京址平面図の作成」『神戸市立工業高等専門学校研究紀要』(52), pp.117-120 2014 および中尾幸一、町田吉隆「島田正郎氏作成祖州城址地形図の検証：衛星画像を用いて」『神戸市立工業高等専門学校研究紀要』(52), pp.91-96 2014
- (2)王培新「八連城-2004-2009 年度渤海国東京故址田野考古報告」文物出版社 2014 および吉林省文物考古研究所 等編『西古城-渤海国中京顯徳府故址田野考古報告』文物出版社 2007
- (3)武田和哉「契丹、遼都城的形制変化と特徴」『東北亜古代聚落与城市考古国際学術研討会論文集』pp.319-332 科学出版社 2015
- (4)高橋学而「遼中京大定府の成立：管轄下の州県城から」『アジア遊学』(160) pp.129-140, 勉誠出版 2013
- (5)白石典之『チンギス・カン』pp.109-110, 中央公論新社 2006
- (6)白杵勲『東アジアの中世城郭 女真の山城と平城』pp.9-16 吉川弘文館 2015
- (7)劉志一「克什克騰旗金代長城遺跡」劉志一編『尋覓克什克騰』pp.61-67 国際文華出版社 2002

(8)「至元七年八月辛巳、設應昌府官吏。」『元史』卷七世祖本紀四および「至至元七年、斡羅陳萬戸及其妃囊加眞公主請于朝曰、本藩所受農土、在上都東北三百里答兒海子、實本藩駐夏之地、可建城邑以居。帝從之。遂名其城爲應昌府。二十二年改爲應昌路。」『元史』卷一百一十八 列傳五 特薛禪(中華書局 標点本 1976 以下、同じ。)

(9)宇野伸浩「チンギス・カン家の通婚關係の變遷」『東洋史研究』52-3, pp.405-413 1993

(10)「(至元)十四年、只兒瓦台叛、圍應昌府、時皇女魯國公主在圍中。元臣以所部軍馳擊、只兒瓦台敗走、追至魚兒濼、擒之、公主賜賚甚厚、奏請暫留元臣鎮應昌、以安反側。居一歲、召至京師、遷明威將軍、後衛親軍副都指揮使、還鎮應昌。又三歲召還、加昭勇大將軍。」『元史』卷一百四十九 列傳三十六 移刺捏兒

(11)「元貞元年、濟寧王蠻子台亦尚囊加眞公主、復與公主請帝、以應昌路東七百里駐冬之地創建城邑、復從之。大德元年、名其城爲全寧路。」『元史』卷一百一十八 列傳五 特薛禪および「(元貞元年春正月)乙亥、追封皇國舅按只那演爲濟寧王、諡忠武。封皇囊加眞公主爲魯國大長公主、駙馬蠻子台爲濟寧王、仍金印。」『元史』卷十八 成宗本紀一

(12)「(大德元年二月)戊戌、陞全州爲全寧府。」『元史』卷十九 成宗本紀二および「(大德七年十一月)辛未、陞全寧府爲路。」『元史』卷二十一 成宗本紀四 前項(11)に関して、汪輝祖『元史本證』證遺一に「傳云、大德元年、名其城爲全寧路誤。」とある。

(13)「弘吉刺之分邑、得任其陪臣爲達魯花赤者、有濟寧路及濟、兗、單三州(中略)其應昌、全寧等路則自達魯花赤總管以下諸官屬、皆得專任其陪臣、而王人不與焉。」『元史』卷一百一十八 列傳五 特薛禪

(14)「(至正十四年夏四月)復立應昌、全寧二路。先是、有詔罷之、以撥屬魯王馬某沙王傳府、至是有司以爲不便、復之。」『元史』卷四十三 順帝本紀六

(15)「(至正二十八年)八月庚午、大明兵入京城、國亡。後一年、帝駐于應昌府。又一年、四月丙戌、帝因病疾殂於應昌、壽五十一、在位三十六年。太尉完者、院使觀音奴奉梓宮北葬。五月癸卯、大明兵襲應昌府、皇孫買的里八剌及后妃并寶玉皆被獲、皇太子愛猷識禮達臘從十數騎遁。」『元史』卷四十七 順帝本紀十

(16)李逸友「元応昌路故城調査記」『考古』1961年10期 劉志一「元応昌路遺址」『内蒙古文物考古』1984年3期

(17)中国歴史博物館遙感與航空攝影考古中心、内蒙古自治区文物考古研究所編『内蒙古東南部航空攝影考古報告』pp.208-209 所載「図 82 元応昌路故城址」(編號1A-201097-7)科学出版社 2002 および白石典之「オロンスム城の築城年代」『オロンスム文書データベース』

<http://www.eurasia.city.yokohama.jp/olonsume/thedate.html>